

至誠

明治神宮武道場
至誠館 館長

荒谷 卓

その十四 内省

「道」と名のつく稽古事は、そのプロダクトよりもプロセスが重要視される。例えば武道では、稽古を通じて

「自他共に心身を正す」不断の研鑽錬磨こそが重要であり、「型を憶えた」、「技を身につけた」、「試合に勝ったなど」というのは、初心の目標とは成りえても武道の目的ではない。

鹿島神流では、「初において身体を整え、中において心気人倫を養い、極めては宇宙創元の理を悟る。これが奥義である」とする。そこに至る過程で得た経験と悟りを、世のため人のために顕現する生き方が「道」となる。物事を正すためには、よって立つ柱が必要である。神様を数える単位として一柱二柱とするのも、神々が歴

史を貫く正しさを御示しになっていくからであろう。

武には、「道」「術」「芸」という階層があるが、「芸」は単純に技法（テクニク）であり、「術」は人の思想哲学、「道」は天（自然）の道理である。天の道理から逸脱することのないよう、人が思想哲学を探求し、それを技法として具体化する。これが武道の正しさのあり方であり柱となる。特に重要なことは、自己を鍛練しながら内省し、自分の中に「正しさ」を育んでいくということである。

人間の内に隠された「宇宙の真理」
私が、ドイツ人の友人から聞いた

『真理の秘密の場所 (The secret place of wisdom)』という話を紹介したい。

「むかしむかし、神々は大変心配されました。『もし人間が分別がつかず、十分に成長しないまま、宇宙の真理を発見して使用してしまったら、んでもない最悪の状態に成るだろう』と。そこで、神々は、人間が本当に分別がつかような成長をきたすまで『宇宙の真理』を隠して保存することにしました。さて、ではどこに隠したらいいか。ある神様が提案しました。『地球で一番高い山の上で隠そう』、しかし、他の神々は『欲の強い人間はきつとその山に登って見つかるに違いない』と反対しました。またある神様が『海のもっとも深いところに隠

したらどうだろうか』と意見しましたが、『いやいや、それは危険だ。分別のない人間は、自らの成長をきたす前に、がむしゃらにその場所を探し当てるだろう』と、やはり却下されました。最後に、最も賢い神様が次のように提案しました。『私は最適の隠し場所を知っています。宇宙の真理は、人間の内に隠しておくことにしましょう』『そうすれば、人間が自分自身を内省し、自分自身の成長を成し遂げたときに初めて宇宙の真理に出会えることになる』と。神々は大いに賛同し、こうして『宇宙の真理』は人間自身の内に隠されたのでした。」

この話では、人間は自らの内に『宇宙の真理』を有しているのだが、それに気づくためには自らの修行・努力が必要だということを論じている。自然の中の一つの存在としての自己発揮の修業と鍛練を為さずして、知的作業のみで真理を解き明かそうとか、宝物探しのように全知全能の力を獲得しようなどという行為が、どれだけ愚かで禍をもたらすかは歴史の示すところであるが、いまだにそれに気がつかない人々が多い。

日本の武士道が近代化という時代の激動を経て今なお残っているのは、武道の鍛練には、まさにこの話のように『自分自身を内省し、自己の成長を成し遂げたときに初めて、宇宙の真理に出会えることになる』プロセスを持ち合わせているからである。

それによって、一人ひとりが天(自然)の法理に則り思想を持ち、自立的に判断し行動できる人材を育成してきたのである。

これにたいして、欧州の騎士道の場合、個々の騎士たちに自立した判断は求められず、契約関係に基づいて、教会や王から示された服務規律に従うことが要求された。当然、教会や王が腐敗すればその命令に従う騎士たちも腐敗する。ヨーロッパで騎士道が消滅したのは、騎士そのものに主体的自己練磨や内省の慣習が根付かなかったためだと思われる。

人権思想と市場原理がもたらした「権利」の肥大化

支配層の腐敗と墮落から、彼らの権威・権力を剥奪するための実力行動が革命として成功し、その暴力による勝利を正当化するために「人権

思想」がつくられた。

近代の人権思想は、権利の獲得のための活動を活性化させた反面、自己を内省し道徳倫理を養う努力は劣化させた。つまり、人間は努力せずとも生まれながらに権利を有しているとしたことで、人間が自己を内省し、内面の成長を図る必然性がなくなってしまう。また、その権利の行使に絶対的正当性を与えたことで、権利を行使する主体の性質に関わらず個人の欲望の無制限な発動をも正当化できる根拠を与えた。

例えば、昨年のフィリピンの台風災害の様子を見るに、被災したこと自体は大変気の毒ではあるが、その後の食料の強奪や、奪い合いの果ての殺し合いなど見ていると災害以上に悲壮な気持ちになる。米国でもハリケーン被害のときに同じ状況に陥るのを見た。このような行為は、日本人の感覚から言えば、浅ましい行為である。しかし、彼らは、それを自然権を行使する正しい行為とみなす。これが近代欧米思想の根本原理である。

個人の権利をより確実に保全するために、集団化し国家を形成するのが近代国民国家の仕組みだ。つまり、民主主義は個人の権利を保全するた

現代の人たちは、自分は自由意志でデータを利用していると思いついて、そのデータは誰かが管理・操作しているものであり、現実にはデータを管理・操作している者たちの管理下に置かれてしまう。「データ信仰」宗教のようなマインドコントロールを受けていることに気づく必要があるだろう。

自分の内面にある価値観に基づかず、自分の外にあるデータに自分の人生を依存していれば、無意識の内面に誰かの管理下に置かれてしまう。

自らの内なる遺伝子レベルの価値観に立ち戻り、外にあるものの影響を受け、以前に自分をまず正す、という発想が必要である。

武道で『精神修養』を重視するのは、自らを内省し自己を正すためである。その延長線で「社会を正し」「国を正し」「世界を正す」という発想に広げていくのである。稽古は、その正しい力を自分の中に育むためのものである。

現代の日本の社会に欠如しているのは、物事を正すというセンスである。AとBの比較や評価、経済大国でなければいけないという目標、それに基づいて「経済成長しなければいけ

め的手段としての契約とみなされる。本来は、自己の権利を無制限に発揚することが正しいのだが、自己保全のため、やむなく権利の一部を放棄して民主主義社会の一員と成る。だから、国家の政府は必要悪で、ベストのシステムではないがベターなものだということになる。

近代以降、世界史は西欧史に飲み込まれ、国家単位で権利の争奪戦を繰り返して、冷戦によってピークに達した。そして、冷戦終了とともに、個人の権利の保全手段としての国家の役割は後退を迫られている。

現在は、国家に依存しなくても自己保全ができる程に富める個人が現れ、その権利をいっそう拡張できる市場というシステムが確立された。彼らにとつて民主主義は、もはや、権利を保全するための手段としての有効性は失われ、むしろ、権利の行使を制約し阻害するものとなってきた。つまり、市場原理による自由競争主義こそ、無制限に権利を行使できる正しいシステムというわけだ。

もう一度、ドイツの友人から聞いた話に戻る。『もし人間が分別がつかず、十分に成長しないまま、宇宙の真理を発見して使用してしまつたらとない』というもつともらしい意見があるが、そもそもなぜ経済大国になることが正しいのか、経済大国になつて何を為そうというのか、といった根本的な議論は聞かれない。

安保問題もわかり。国家安全保障会議、特定秘密保護法案と、米国から与えられた宿題(2005年日米合意の「日米同盟…未来のための変革と再生」の具体的推進、2007年日米締結の「軍事情報包括保護協定(GOMIA)の国内法整備等)を遅ればせながら一挙に片付けた。しかし、我が国の安全保障全般において、日米同盟を有効ではあるがひとつの選択肢として位置づけるような主体的戦略構想は、被占領時代のまま放置され依然として見えてこない。

戦略は米国に任せ、日本はその中でうまく生き抜いていくなどという冷戦時代のようなことを考えているとすれば大問題だ。

他国の決めた戦略に上手に乗っかりいい成績を上げて利益を頂戴しようなどと考えていると、根本性質が変わってしまう。略奪ゲームや殺人ゲームでいい成績を上げられるようになるということは、その国家国民の根本性質が略奪者や殺人者になるとい

んでもない最悪の状態に成るだろう』。

人格形成や精神修養を全くしない人間が、莫大なる富と権力と武力を手に入れ、自己の権利を無制限に行使したら世界がどうなるのか。説明は要しないだろう。

権利の無制限の行使を可能とする自由競争原理を最優先し、唯一民主主義が制度として機能する国家が市場原理に介入することは認めないという思想は、まさにこの最悪の状態を現実のものとするようになる。

家族のような社会を創ることを理想とした建国理念こそ日本の国家戦略

日本の社会には、常に一貫した一つの「柱」が存在した。共存共栄の思想である。時代によって時の権力者が私利私欲に傾き、社会が大きく腐敗・混乱した社会情勢になると、天津日継高座(あまつひつぎたかみくらい)にある皇孫を「柱」として社会が正されてきたのである。

日本が近代以降も大国の地位を保持し得たのは、ひとつには明治維新に際し、明治天皇が「すべて神武創業の始に基づく」として、神武天皇が建国

うことだ。

共栄共存のよりよい世界を創造する

世界中で最も長く経営を続けている企業は、西暦578年(飛鳥時代)創設の「金剛組」という日本企業であり、創業200年を超える企業は、圧倒的に日本に多いそうだ。その大多数の経営方針は、「家族のような会社」であり「世のため人のため」だという。人倫と道徳こそが社会と国家の力の基盤であり、日本にはそれを社会のために具体化して活用する風土があるのだ。

様々な政策議論は、損得勘定以前に、家族のような社会を創ることを理想とした建国の価値観と照らし合わせて正しいものなのかどうかを判断することから出発しなければならぬ。

長い歴史の中で、我々日本人は、人倫道徳が文化慣習として自ずと身につくほどまでに高貴な社会を築き上げてきた。その価値基準に立ち返り社会を正していくことが必要なのだ。そしてそれは、「人権思想」を超えた、真の共存共栄のよりよい世界を創造するための思想として、世界の人々と共有していくべきものであろう。